

一編集後記一

先日、秋田で開催された土壤肥料学会に参加させていただいた。修士までは土壤学研究室に所属しており、最後に参加したのは平成元年の広島大会である。以来17年ぶりの参加になった。その間は、主に農業土木学会および土壤物理学会にて発表する機会が多く、諸兄との議論を通じ、同じ土壤を対象としての研究の組み立て方、解析や評価方法について学ばせていただいた。研究の意義や方法論についてそれなりに培われた基準を持って、久方ぶりの大会に参加してみると、懐かしさとともに幾つかの研究上の相違点などが意識された。浅学のそしりを免れないが、その実感したことについて触れてみたい。

それは対象とした個々の事例に限定されるような発表が、多く目についたことである。土壤は多様であり、母材や気象、土地利用、作物種、地形条件に応じて地域ごとあるいは圃場ごとに異なるため、どれも新たな発見であることに間違いはないが、かえって一般則が見えにくくなってしまった。土壤や作物生理に関する基礎知識が欠落しているといった、受け手側の問題かもしれないが。この点に関して土壤物理分野について顧みると、実験室レベルや推定モデルにおける解析結果と自然条件下で生じている現象との乖離が解消されていないといった問題と同質であり、単にその方向性が逆になっているのかもしれない。アプローチはどうであれ、現在の自分の位置を認識して、この本質を見失わなければどうにか

展望は開けるのだろう。私の場合は、理論と現象との波間に漂っていただけであったように思える。

それから、発表や旧友たちとの議論を通じて、有用な技術とは？実際に役に立つ研究とは？といった疑問が膨らんできた。生産現場を支える研究者の割合が多いこと、最近は生産性の面から土壤を評価する機会を与えてもらっているだけに、そんな視点から拝聴させていただいた。たいした仕事もしていないが、適応性や速効性よりも普遍的な結果を見いだすような研究が、広く浅いよりも狭く深い研究が優れていると潜在的に思っていたことに気づかされた。土壤劣化、あるいは環境汚染や温暖化といった土壤を取り巻く問題は、解決策を見いだすまでそのままの状態では待ってはいくれない。それに元々自然物である土壤に対して、人が勝手に定めた物理的、化学的な側面からのみの手法では、太刀打ちできないのも自明である。作物、気象、地質といった自然科学分野だけでなく、対策が具体化するほど農業経済といった人文科学的な知識も必要になる。学際的な手法を武器に立ち向かわなくてはならない。批判の矢にさらされて萎んでしまうとも、機会を見つけては自分からアドバランを上げて議論を深めることの大切さを実感した。そんな当たり前のこと、前々から指摘したでしょうと諸先生方の苦い顔が想い浮かぶが。土壤物理学会はもちろん、どの学会も門戸を開放しているはずである。

(編集委員 柏木淳一)

土壤物理学会

事務局構成

会 長	長谷川周一 (北海道大学)
副 会 長	谷山 一郎 ((独) 農業環境技術研究所)
庶務幹事 (庶務)	成岡 市 (三重大学)
〃 (会長付き)	倉持 寛太 (北海道大学)
会計幹事	柏木 淳一 (北海道大学)
編集幹事	岩田 幸良 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
会計監査	矢沢 正士 (北海道大学)
〃	渡辺 治郎 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
編 集 委 員 会	石渡 輝夫 ((独) 北海道開発土木研究所)
委 員 長	柏木 淳一 (北海道大学)
委 員	加藤 邦彦 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
	北川 巖 (北海道立中央農業試験場)
	三枝 俊哉 (北海道立根釧農業試験場)
	取出 伸夫 (三重大学)
	永田 修 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究機構)
	中辻 敏朗 (北海道立中央農業試験場)
	中原 治 (北海道大学)
	橋本 均 (北海道立中央農業試験場)
	横濱 充宏 ((独) 北海道開発土木研究所)